

## 令和5年度 文京区障害者地域自立支援協議会

### 第1回子ども支援専門部会 要点記録

日時 令和5年6月15日（木）午後1時2分から午後3時2分まで

場所 文京シビックセンター3階 障害者会館会議室C

#### 【会議次第】

1 開会

2 議題

(1) 障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会について

(2) 子ども支援に係る課題等について

3 その他

#### 【文京区障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会員（名簿順）】

##### 出席者

向井 崇 部会長、勝間田 万喜 副部会長、高山 直樹 部会員、荻野 美佐子 部会員、  
内海 裕美 部会員、高山 陽介 部会員、内田 千皓 部会員、鈴木 孝子 部会員、  
鵜沼 苗子 部会員、川崎 洋子 部会員、加藤 たか子 部会員、高橋 拓也 部会員、  
井上 アヤ乃 部会員、松本 美紀 部会員

##### 傍聴者

3名

#### 1 開会

部会員挨拶

部会長 向井部会員に決定

副部会長 勝間田部会員に決定

## 2 議題

### (1) 障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会について

資料第1-1号から資料第1-4号について事務局及び向井部会長から説明

### (2) 子ども支援に係る課題等について

資料第2号について事務局から説明

#### ① 各部会員による課題等の説明

- ・ 支援の場が不足し、保護者が困っている。情報共有ツールの活用がうまくいっていない現状がある。相談の場のマンパワー不足。支援の専門性にばらつきがある。アセスメントの難しさ。困っている子の視点での理解が必要。
- ・ 相談支援体制の不足の改善が必要。習い事や受けるサービスの過多による子どもの疲弊を是正するための保護者支援の重要性。ライフステージの区切りにおける説明や手続き等による保護者の負担が大きい。障害児の子育ての負担と虐待リスクの増加が問題となっている。アセスメントの引継ぎや情報共有の不足が子どもの成長と支援に影響。
- ・ 発達の特性を持つ子どもの保護者が困難を抱えている場合が多い。学校側はコミュニケーションが取れていないため、保護者との関係性が築きにくくなっている。情報過多により子ども自身が求めるものではない支援を受けることがあり、それが子どもの疲弊や虐待につながることもある。保護者と関係性を築ける支援者が解決の鍵となる。学校にはスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーがいるが、自発的に動けない場合もある。個人情報の制約があるため、情報共有が難しい。
- ・ 相談支援としての役割はモニタリングや定期的な面談であり、日常的な変化や困り事は見えにくい。相談支援の利用年齢が低くなっており、0歳児の保護者からの相談が多い。保護者が相談支援の立場や役割を理解していないケースがある。家庭によりニーズが多様。習い事を増やしたい、療育を受けたいという希望を持つ保護者がいるが、関係する事業所等が多くなり、連携が難しい。一部の保護者は困っているが、現状に慣れてしまっているため、支援やアドバイスを受け入れにくいケースもある。学校や医療機関の忙しさから、支援学級や普通学級の先生たちとの連携が難しい。

- ・ セルフプランのケースがあり、計画相談の必要性があると感じる場合もある。移動支援の事業者数が不足している。担任の先生が保護者とコミュニケーションを取ることができず、校内で児童を取り巻く環境の調整について共有できていないケースがある。学校内で支援体制を改善するシステムが望まれている。
- ・ 保育園では在園児の保護者や見学者、地域子育てステーション、一時保育の利用者と直接話す機会があるが、地域で困っている人たちの人数や状況は把握していない。子ども家庭支援センターを通じて支援を受けている家庭もいるが、つながっていない家庭も存在するため、現状つながっていない家庭にも支援が届けられるとよい。
- ・ 幼稚園や保育園からの通報に基づき、発達的な問題を抱える子どもを訪問するケースが多い。一部の家庭では、発達支援のニーズに気づけず支援の提案を拒否されたり、特性を受け入れられないなどの問題がある。親はさまざまな相談窓口で相談しているが、思うような回答を得られず、別の場所への相談を繰り返している状況もある。子どもを訪問してサービスにつなげることができる家庭とそうでない家庭が存在し、後者の家庭に対しての支援が難しい。
- ・ 乳幼児健診では、要医療や要支援児等をスクリーニングし、必要な医療やサービスに繋いでいるが、紹介先やコーディネートの人材不足、支援拒否など課題もある。乳幼児の健診は3歳が最終のため、それ以降の年齢の子どもの把握と支援は他組織で行われており必要時連携している。
- ・ 登下校時の移動支援について、朝と帰りの時間帯にマンパワーが不足しており、必要な人材を確保するのが難しい。支援レベルは3つに分けられる。1 校内での連携、2 外部人材の活用、3 特別支援学級や支援教室の3つ。レベル2の児童には特別支援教育担当指導員や幼児保育支援員などの支援員がつくことになるが、人材が見つからない。特別支援教育に関する教員の専門性向上が求められており、具体的な事例や福祉サービスに関する知識の習得に苦労している。バリアフリーパートナーは地域のボランティアであり、専門性は必要とされないが、役割の範囲や担当内容について課題がある。
- ・ 18歳問題として成人後の支援先の不足が課題となっており、医療や保健師などへのつながりが困難である。フォーマルなサービスがまだまだ少ないため、インフォーマルな資源や学校の協力を活用して支援を行っている。移動支援などの不足

があり、日々支援方法を考えている。相談支援事業所の不足が課題となっている。保護者の方のサービス詰め込みの問題があり、子どもたちの負担が増えている。

## ② 課題等の説明に対するコメント

- ・ 情報の共有に関して、文京区内の情報やリソースの把握と共有が不十分であり、全体像が見えない状態である。

検査やアセスメントの結果の情報が親に適切に伝わっていない。数字の結果だけが提供されており、アセスメントとして機能していない。保護者が十分に機能する前提の仕組みではなく、専門機関間の情報共有と連携による解決が求められており、個人情報の制約を考慮しながら、共有の仕組みを構築する必要がある。

- ・ 1歳半健診と3歳児健診以降の健診数が少なく、発達障害などの特性を見逃す可能性がある。小児科医の役割について、特性の発見や個別指導が重要だが、時間的、予算的な制約により、実現が難しい状況にある。健診の充実、区内の情報集約、ワンストップの相談先の必要性。研修や情報共有による医療機関やサービス提供する側の質の担保が求められている。
- ・ 障害者支援における切れ目の問題。各年代ごとの支援にのりしろを作れば切れ目を解消できる。フィンランドのネウボラを参考にした支援の必要性。妊婦からの関与や継続的な支援を通じて、自己形成や自己決定のサポートを行うことが望ましい。ケース検討会議を通じて、教育と福祉の連携や子ども・親の参加を促進し、成功事例を創出するべき。

## ③ 意見交換

- ・ 担当者の切り替わりが課題。継続性のある支援や対応者の安定性が重要視される。担当者が変わらないことがうまく機能する場合もあれば、うまく機能しない場合もある。支援者同士の関係性が重要。良好な関係性の構築により、良い文化の形成が期待される。
- ・ 担当者が変わることを前提とした引継ぎや情報の共有が重要。切れた場合にもつながりを保つために、過去の職員や情報を活用する方法もある。本人を中心にした会議体を設けて、関係者が集まり情報を共有することが望ましい。
- ・ 支援者が多数になった際は、関係者の顔の見える関係に加えて仕組みを考える

必要がある。保健師は地区担当制のため支援は途切れない仕組みだが、支援者から拒否をされることもあり継続支援の困難例もある。健診から教育センターや子家センに繋ぐケースの連携はスムーズに行えている。

- ・ 保健師との連携が非常に重要であり、保健師の健診を通じて多くのつながりが形成されている。連携のスムーズさや申し送りの丁寧さにより、お互いの仕事を理解しながら連携が行われている。外部機関や福祉と教育の縦割りの問題に対しても連携を促進することが重要であり、このような取り組みによって大きな変化が期待される。
- ・ ケース検討会を実施することが重要であり、実際の現場での話し合いが有効であると感じている。教師たちは教育においてさまざまな会議や研修に参加しており、時間的な制約がある。コンパクトで効率的なケース検討会議を実現するために、オンライン会議や時間制約の設定などの方法を模索する必要がある。顔を見て話し合うことの利点や、ケース検討の模擬的な経験を通じてコミュニケーションスキルを向上させることが重要である。
- ・ 先生方も忙しいが、一緒にケース検討を行うことで効果的な方法を見つけられると考えている。ケース検討のやり方には様々なアプローチがあり、コンパクトな形式も存在する。障害児支援ネットワーク内で有志が集まり、事業所紹介や事例検討をオンラインで行っている。オンライン環境では小グループでのディスカッションも可能であり、そのノウハウが蓄積されつつある。
- ・ キーワードとして情報の共有、アセスメント、キーパーソン、事例検討が挙げられる。子ども中心のアプローチが重要であり、困っている子や親子に対するサポートが必要。ネットワークを形成し、子どもを中心に各機関が連携してサポートすることが望ましい。

### 3 その他

- ・ 障害児支援ネットワークの紹介

2016年から活動をはじめ、有志が集まり顔の見える関係を築いてきた。活動では意見交換や情報共有が行われ、メンバーも増えてきた。今回はスクールソーシャルワーカーの方が仕事や困りごとについて説明し、事例の共有や相談が行われる予定。

- ・ 参考資料について事務局から説明